

セリオーツ

湖畔の白樺に秋色の薄衣^{うすぎぬ}

澄明な故に不可思議な朝^{あした}に承露とならむ

その五体に染み渡り、哀しみとなるとも
なおこの彩りの情景より立ち去るに能はず
むしろ摩滅した感性を情けなくもてあそぶ

然れども来るべき季節の足音に耳を澄ませば
橋の上より覗き込んで恐怖に震撼す
私を連れ去らんとする悲愴の抒情の
迫り来るを知らせる途切れ途切れの微風が
野守の鏡に映る穏やかな構図を時折揺るがす様に

逃れ難き運命ならば立ち向かう力を与え給え
凍えるが如き寂寥にそぞろ歩くこの焦燥の代りに

かつて降りしきる雪の中に一瞬^よ過ぎった
清冷な希望と暖かな幻影にも似たものを
この掌に入るほどのほんの微笑な力を

既に染まり始めた広葉樹は斜陽を通し
紅と黄金の淡い光を私は浴びて立つ
惨めにも激しい咳にうずくまるこの身体を
なお、愛すべきこの世界の中に留めさせ給え
再び春の暖かな陽射しを浴びさせ給え

(1984.10.10)